

論文審査の結果の要旨

氏名：對馬 紗由美

博士の専攻分野の名称：博士（生物資源科学）

論文題名：技術をめぐる表示制度形成過程と社会的受容 ―遺伝子組換え表示を事例として―

審査委員：(主 査) 教授 清水 みゆき

(副 査) 教授 川手 督也

教授 小野 洋

本論文は、食品の生産から消費までの各段階に用いられる革新的な技術についてのリスクコミュニケーションは、どのような仕組みによって適切となるかについて、科学技術社会論を用いて明らかにしたものである。とくに、食料の供給側と消費側で、専門知識の乖離が大きいと考えられる GM 技術を対象に、新技術を用いて生産された食品のリスクコミュニケーションにおいて、食品表示が果たす役割について検証し、食品表示が消費者受容の形成に与える影響を明らかにした。

食品表示の分析アプローチとして有用と考えられた科学技術社会論（STS：Science, Technology and Society）の分野では、SCOT（the social construction of technology）によれば「ある技術が変化または受容されていく理由を、技術固有の性質に依らず様々な組織が関わる問題解決の過程に見出そうとする」研究アプローチであり、レトリック的閉鎖（rhetorical closure）と問題の再定義による閉鎖（closure by redefinition）といった閉鎖メカニズムが提唱されてきた。さらに SST（the social shaping of technology）アプローチでは、ある技術の形成過程について、主体の行為と制度的要因・構造的要因、物的要因の 3つを体系的に結びつけた考察が行われ、技術の社会的なマネジメントの実践基礎となるような、バランスの取れた技術形成プロセスの理解が試みられてきたが、そこでは食品が対象となる分析はなかった。

こうした科学技術社会論に食品の技術革新を意味づけし、さらに異なる定義や意見のグループ間に位置し、それらをつなぎとめるバウンダリーオブジェクト（BOs：boundary object）の概念を用いて食品表示を捉えることで、新規技術を用いた食品のリスクコミュニケーションにおいて、GM 表示の BOs としての機能を規定し、その後の消費者受容の形成を分析したことにオリジナリティがある。従来の SST アプローチでは同一の枠組みで説明されていた技術発展と技術衰退のケースを、BOs としての機能する食品表示の影響によって切り分けて提示した本研究の枠組みは、食品のリスクコミュニケーションにおいて、ステークホルダーが制度化の意味付け段階から参加する価値を捉えなおすための根拠を新たに示し得たと言える。

よって本論文は、博士（生物資源科学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和 3 年 10 月 7 日